

高機能広汎性発達障害の感情認知

— 状況刺激と感情概念の関連から —

宮 本 淳

【問題・目的】

高機能広汎性発達障害の者は、言語や学習能力に大きな遅れはないにも関わらず、他者との感情の交流に乏しく対人関係は紋切り型であると言われている。それについて、これまでの広汎性発達障害者を対象にした感情認知研究では、Hobsonらに代表される、感情を表現する表情や音声と感情語のマッチングというような各感覚入力レベルでの感情認知研究と、Baron-Cohenらを中心とする心の理論、すなわち意図（信念）の理解を必要とする二次的感情（驚きや当惑など）の理解の研究という非常に限定された2つの側面からのみ説明がなされている。しかしながら、彼らが自身の体験を表記した私記などの分析からは、「内言や感情語などを用いて思考が表現されることがない」ことや「感情語を適切に使えない」といった一次的感情（怒り、喜びなど）の認知が劣ることが自閉症スペクトラムの中で言語能力が良好な青年の中にも存在することが示されている。

この点について、まず彼らを対象にして「感情語の意味を尋ねる課題」及び、「感情が起こる状況を作る課題」という2つの課題からなる予備調査を行った。その結果、彼らの多くは感情の生起する状況を比較的適切に想起できるが、感情を「感情を引き起こす状況」や「表情」と区別できないことが示唆された。

そこで本研究では、従来の研究のように彼らの「状況」、「表情」、「感情」という単一要因の認知を検討するのではなく、これらを複数の刺激として同時に提示することにより上記のような感情認知スタイルの存在及び、その影響について検討することを目的とした。また、感情を「状況」や「表情」と混同してしまう傾向は健常の児童期前半の段階でも類似した理解の様相が示されている。そのため、そのような健常児での感情概念の発達を測る課題を高機能広汎性発達障害の青年に適用することで彼らの感情認知スタイルを発達的に位置づけることを試みた。

【研究1】

目的：問題意識から、「感情を喚起する状況」と「表情」の個々の認知には問題がないとされる高機能広汎性発達障害の者が、状況と表情が矛盾する場面を提示された際にどのような統合処理を示すのかを健常群と比較検討することを目的とした。

対象：臨床群は広汎性発達障害者の自助グループ「アスペの会」に参加している青年及び精神科児童外来にてフォローアップを受けている青年のうちIQ-70以上かつICD-10によってアスペルガー症候群及び非定型自閉症と診断をうけたもの19名（男子13名 女子6名 13歳～23歳 平均16.8歳 平均IQ：VIQ：90.08 PIQ：96.54 Total：91.94）であった。健常群は小学校1年生（男子12名 女子10名）3年生（男子16名 女子12名）6年生（男子18名 女子18名）に対して臨床群と同一課題を実施した（研究2、3も対象は同様）。

方法：主人公が“嬉しいはずの状況で悲しく見える表情をする場面”と“悲しいはずの状況で嬉しく見える表情をする場面”を刺激場面として提示し、主人公の感情を推測させる実験課題を実施した。

結果と考察：健常児では矛盾課題に対して1年生の半数以上が2つの刺激を考慮しそれらを統合する理由を考案することができ、学年が上がるに従いほとんどのものが統合処理をするようになることが示された。一方、多くの臨床群の被験者は言語性知能の高低にかかわらず、「状況」と「表情」の2つの情報刺激を統合した処理ができず、片方の刺激のみによる処理や場面の一部から全体の文脈にそぐわない処理をするという特徴があることが示された。

このような特徴を持つ矛盾課題の処理の仕方から彼らの多くは各感情が起こる状況や表情のそれぞれは理解することができるが、それらを統合することの困難さを持つことを示していることが言える。その背景には、感情を状況から独立した概念として取り出せないことが推測される。

【研究2】

目的：研究2では高機能広汎性発達障害の者が「表情と感情が一致しないことがある」ということを理解できるか否かについて検討した。

方法：研究1同様に実験者は被験者に例話を提示し、主人公の感情を推測させる実験課題を実施した。各例話には「対人条」と「単独条件」を設定し、単独条件において表出する表情を、対人条件では統制することを理解できるか否かを検討した。具体的には、例えば、「誕生日プレゼントに既に自分も持っているものを貰う」とい

う仮想場面の中での主人公の表情や感情を表情図を併用して単独場面、対人場面それぞれについて推測させた。

結果と考察：健常群では学年による有意な差が見られ、年齢が上がるにつれて統制についての理解が進むことが示された。一方、高機能広汎性発達障害のほとんどのものが対人場面でも感情表出を統制することを理解しておらず、単独場面で喚起される感情は対人場面でもそのまま表出するという理解をしていることが示された。

特に彼らの反応には、場面の一部分に反応し処理をする特徴があることが顕著にみられ、断片的な状況の理解が優先されている可能性が示された。すなわち、主人公の感情を保持して場面全体を統合する処理は見られず、単に場面の一部分に対応するなど断片的な理解をする傾向があることが示された。

【研究3】

目的：健常児の研究で、児童期前半では状況の変化のみから感情は変化すると理解をしているが、加齢とともに態度や気持ちといった内的な状態が感情の変化に関与することを理解するようになることが示されている。研究3では、高機能広汎性発達障害の者が感情の変化をどのように理解するかという点から、彼らが感情を内的なものとして捉えているか否かについて検討した。

方法：研究2に続いて実験者は被験者に2種類の例話を提示し、主人公の感情を推測させた。例話の内容は主人公が悲しい（あるいは怒っている）内的特性状態のときに嬉しい状況が起こるといように主人公が複雑な感情をもつように作成した。

結果と考察：各場面において学年差がみられ、先行研究の示す傾向と同様、学年が進むにつれて感情変化の理解が単に外的な状況の変化から内的なものを考慮するように移行することが示された。一方、臨床群と健常児と比較すると、3年生及び6年生との間に有意差がみられた。彼らの多くは、例えば悲しいという内的な状態を保持し

ながら、同時にPositive感情を喚起する状況刺激を考慮することができず、状況によって感情は一変するものとしてとらえていることが示された。このことから状況と感情が強く結び付いているという、予備調査によって導かれた示唆を支持したと言える。彼らの感情認知には感情を状況から内的な特性として抜き出したり、その状態と状況刺激とを同時に考える統合処理の弱さがあることが明らかになった。

【全体的考察】

本研究では、高機能広汎性発達障害の青年の感情認知が視覚的状況と固定的であり、状況から切り離れた内的な概念として捉えることができないという先行研究や予備調査から導かれた示唆について、健常児の感情認知発達を測る課題を用いてアプローチをした。その結果、臨床群では多くの者が実際にそのような理解をしていることが研究1、研究3の結果から示されたと言える。特に、知能検査との比較からはこのような感情認知スタイルを説明するのに言語性知能は十分な要因ではないことが示された。言語能力や知能に大きな遅れがない青年が、感情認知に関してはこのような理解をしていることは興味深い結果と言える。

しかし、本研究におけるすべての課題を通過する者も存在したため、そのような群の位置づけを明らかにすることで、本研究で示された彼らの感情認知スタイルは自閉症スペクトルに特有なものであるのか、またそれを引き起こす要因について検討することが必要である。

最後に、今回彼らが示した感情認知スタイルは、それぞれが周囲の対人世界を理解しようとして幼少期から獲得してきた対人理解様式を反映したものといえる。そのため適応や対人的経験は彼らの感情認知と重要な関連を持つものである。今後、本研究での感情認知スタイルと社会的適応や対人関係を個々に比較検討することでさらなる臨床的な示唆が得られるものと思われる。